

柱9. 日本の医療・介護制度を 考える

企画2 認知症の介護を考える

座長



南條 輝志男

和歌山ろうさい病院

1945年8月和歌山生まれ。1970年和歌山県立医科大学を卒業、地域医療の現場で内科、特に糖尿病の臨床研究に専念、インスリン遺伝子異常症の発見を契機に1984年米国シカゴ大学留学。1989年 母校の内科学第一講座の教授、2005年に母校の学長（翌年からは理事長兼務）に就任。2010年からは那智勝浦町立温泉病院地域医療研究センター総長、2011年より和歌山ろうさい病院院長。日本糖尿病療養指導士認定機構理事長。日本糖尿病協会理事。



任 和子

京都大学大学院医学研究科 臨床看護学

職歴

1984年 京都大学医学部附属病院看護師
1992年 京都大学医療技術短期大学部助手
1999年 名古屋大学医学部保健学科講師
2000年 同 助教授
2002年 滋賀医科大学医学部看護学科助教授
2005年 京都大学医学部附属病院副看護部長
2007年 同 病院長補佐、看護部長
2011年 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授

座長のことば

我が国では世界に類を見ない短期間で急速に人口の高齢化が進み、2007年に超高齢社会（65歳以上の人口が21%以上）に突入し、2013年には25.1%と4人に1人が高齢者になっています。一方、2013年には認知高齢者が462万人、その予備軍が400万人と発表され、認知症の看護・介護の体制整備が急務であると指摘されています。平成26年度の糖尿病週間の標語は「つながる医療で高める意識、社会でサポート糖尿病」です。本セッションでは認知症の看護・介護において先進的な活動をされている皆様の取り組みについてご紹介頂き、正に「つながる医療・介護で高める意識、社会でサポート認知症」の実現に向けて皆様と共に意見交換が出来ればと期待しています。

柱9-2-1 認知症の介護とは、認知症の人と介護する家族の二人を支えること



高見 国生

公益社団法人 認知症の人と家族の会 代表理事。
1943年、福井県生まれ。京都市在住。元京都府職員。
認知症になった母親を、共働き、育児をしながら約8年間在宅で介護。
介護中の1980年、「家族の会」結成に参画。以降、今日まで代表を務める。
「家族どうしの励ましあい助けあいと社会的関心を高め介護の社会化をすすめる」ことを掲げた活動は全国に広がり、47都道府県すべてに支部がある。会員は11,000人余。

高見 国生

公益社団法人 認知症の人と家族の会

認知症では死なない。したがって、認知症問題とは、認知症を持った本人が病を持ってその後の人生をどう豊かに生きるか、本人を支えて生きる家族が介護とともに自身の人生もどう豊かに生きるか、という問題である。

かつて、認知症になれば人生はおしまい、家族は塗炭の苦しみをしなければならぬという事態に追い込まれていた。

しかし、「ぼけても心は生きている」ことが分かり、「ぼけても安心して暮らせる社会」を目指そうとする機運が高まり、本人支援の重要性が社会的に認識され、それとともに個別の家族支援の必要性も改めて認識されるようになった。

認知症の介護とは、生活を支援し暮らしを支え、豊かな人生を保障することである。

そのためには、人間のやさしさと思いやりの心が不可欠である。それとともにそれらが生きる社会の仕組みも欠かせない。それは車の両輪である。

柱9-2-2 仲間と出会える場所



中西 栄子

京都女子短期大学卒業。
京都市立小学校の教諭として40年間勤務。定年退職後も引き続き、副担任として非常勤講師を勤める。
4年前（63歳の時）、アルツハイマー病と診断を受ける。
夫は、11年前に他界。2人の娘も独立し、現在独居。近くに住む長女が日常生活をサポートしている。

中西 栄子¹、河合 雅美²

¹「認知症の介護を考える」、²中西栄子の娘

毎週日曜日、オレンジカフェ（認知症カフェ）に通うことは私の楽しみの一つだ。63歳でアルツハイマー病と診断され、当時は絶望し孤独だった。母娘喧嘩が絶えず、娘に何事も否定され、塀の中に閉じ込められているようだった。生きがいもなくなり、いつ死ぬのだろうか…と思っていた。認知症という病気は誰にも知られたくなかったので、病気を隠した生活が長く続いた。

転機は、「認知症の人と家族の会」との出会いだった。今では、オレンジカフェやディサービスに通い、日常生活にハリがあり、生きがいも感じている。カフェでは、同じ病気の友人ができ、とてもうれしい。違う世代のスタッフの人達と交流できることも楽しい。カフェでのイベントの一つである散歩も大好きだ。日課の散歩は一人だが、仲間と同じ風景を見ながらの散歩は格別だ。認知症であっても楽しく、生きがいを持って暮らしていけることを同じ病気の人に知らせたいと思う。（代筆・娘）

柱9-2-3 安心して徘徊できるまち、大牟田の挑戦
～地域認知症ケアコミュニティ推進事業～



大谷 るみ子

2001年より社会福祉法人東翔会グループホームふぁみりえホーム長。同年大牟田市認知症ケア研究会を発足、代表となる。大牟田市と一体となり全国に先駆けた認知症コーディネーター養成や徘徊SOSネットワーク構築、小中学校の認知症啓発絵本教室等が評価され、07年に日本認知症ケア学会読売認知症ケア奨励賞、2013年医療の質・安全学会第7回新しい医療のかたち賞受賞。2007年よりNPO法人福岡県高齢者グループホーム協議会理事長。

大谷 るみ子

社会福祉法人東翔会

大牟田市はかつて炭鉱で栄えた町。現在人口は約12万人、高齢化率32.9%と高く、高齢者問題では他の10年先を行く地方都市である。2001年の認知症ケア研究会の発足を背景に、2002年から地域認知症ケアコミュニティ推進事業がスタート。同年の全世帯の実態調査がその後の認知症対策を方向づけた。主な取組は、地域づくりの推進者である認知症コーディネーターの育成、徘徊模擬訓練によるSOSネットワークの構築、小中学校の絵本教室を柱にした世代間交流、若年認知症本人交流会や家族の集い・語らう会、そして地域認知症サポートチームの活動であるもの忘れ検診・予防教室等である。これらは、行政と専門職の協働、医療と介護の連携、地域住民・小中学校等の地域協働のスタイルを生み出しながら、継続的かつ発展的に取り組んできたものである。私たちが目指している「安心して徘徊できるまち」は、きっと、誰もが尊厳を保持して暮らせるまちなのである。

柱9-2-4 訪問看護ステーションによる認知症初期集中支援の取組み



片山 智栄

防衛医科大学校消化器外科、ICU・CCU勤務、企業事業部勤務を経て医療法人社団プラタナス勤務。経営企画室医療連携担当マネージャーとして在宅訪問診療部門の医療連携構築や仕組み作り、健診事業に従事、また訪問診療同行看護師として在宅医療の現場に従事。2012年同社のナースケアステーションを設立し訪問看護ステーションの所長として主に在宅ホスピス緩和ケアや認知症ケアを中心に従事している。

片山 智栄¹、遠矢 純一郎¹、新川 祐利¹、村島 久美子²

¹桜新町アーバンクリニック、²医療法人社団城東桐和会 東京さくら病院

認知症になっても在宅での生活の継続につながるサービス体制の整備を推進するため、厚生労働省は認知性施策推進5カ年計画（オレンジプラン）を打ち出した。ここでは新たに「認知症初期集中支援チーム」を設置し、アセスメント、家族支援などの初期支援を包括的かつ集中的に行う。家庭訪問を行い生活場面で詳細な情報を収集し、本人や家族に対する初期のアセスメントを実施するとともに、本人や家族への認知症の症状や病気の進行状況に沿った対応等についての説明、今後の見通しが立てられるような情報提供、家族に対するアドバイス等（心理教育等）を行い、一定期間、集中的に本人や家族、サポートする地域の介護サービス事業者に関わっていく。今回は当ステーションで実施している認知症初期集中支援サービスの取組みの実際について報告したい。

柱9-2-5 認知症ライフサポートモデル～認知症の人を支える多職種協働モデル～



宮島 渡

社会福祉法人恵仁福祉協会 常務理事
高齢者総合福祉施設アザレアンさなだ 総合施設長
1959年東京都生まれ、1993年より現職に就く 社会福祉士

宮島 渡

社会福祉法人 恵仁福祉協会 高齢者総合福祉施設アザレアンさなだ

「認知症ライフサポートモデル」、初めて聞く言葉かもしれません。認知症の人の「生命、生活、人生」を医療、介護の専門職で支える多職種協働モデルです。2011年から2013年までの間に医療、介護の専門家によって作られました。地域の中で様々な職種の人たちが認知症ケアの携わる上で、それぞれの専門職の持つ知識や情報で支援していたのではバラバラな対応になります。認知症に人への支援はまさにチームで取り組んでいく必要があります。このモデルは、地域の中にチームを作り、根付かせる第一歩のきっかけづくりとして、2013年からスタートした「認知症施策推進5か年計画（通称：オレンジプラン）」の7本目の柱として打ち出されました。

